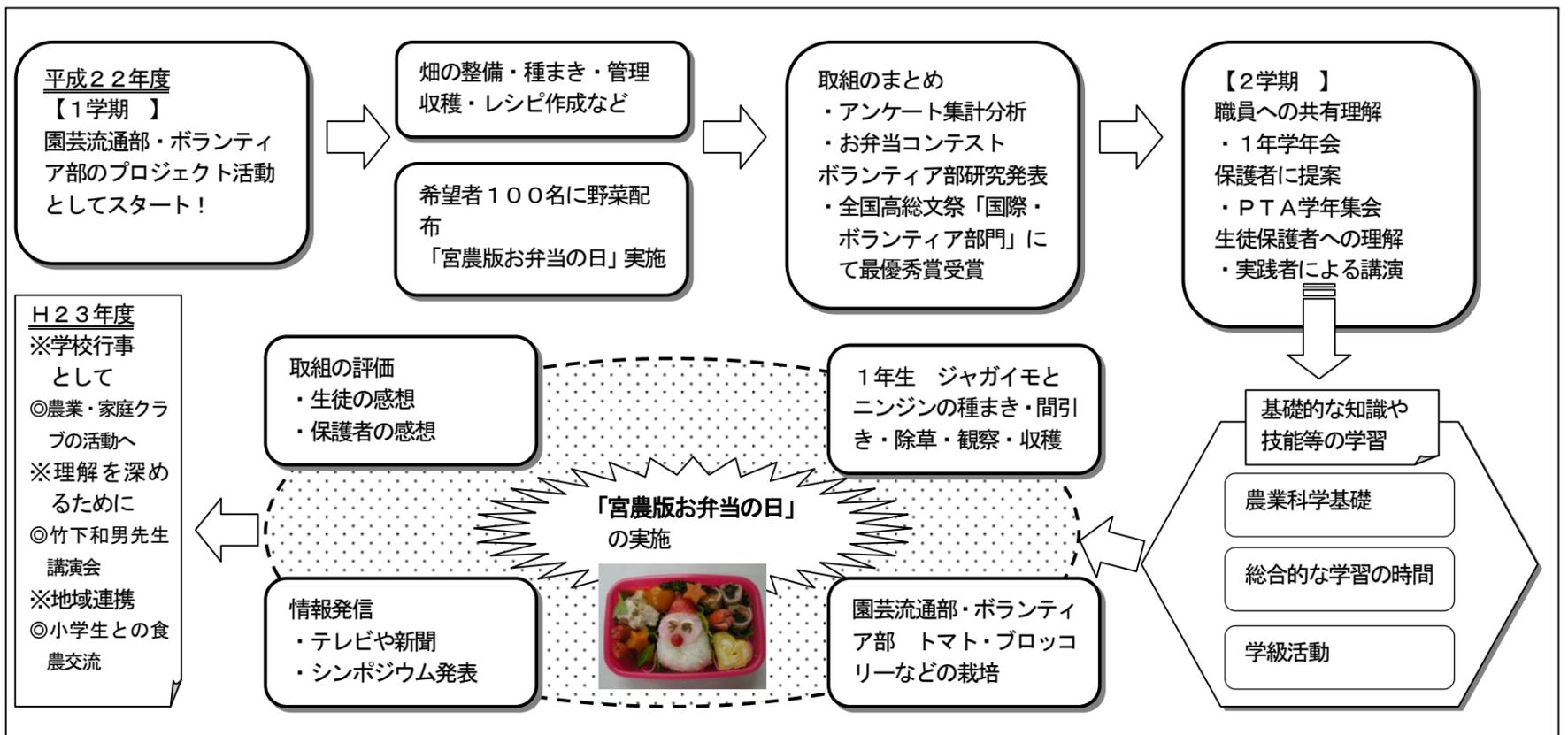


(2) 実施までの基本的な手順



(3) 実践の概要

ア 教育課程への位置付け

「宮農版お弁当の日」は、農業高校ならではの取組として、教育活動の一環として位置付けている。今後は、生徒と職員、保護者が一体となった活動に発展させ、年間指導計画に明示し、目的や計画を明確にして実施していきたい。

カ 課題の設定

『学校で育てた野菜を使って弁当を作ろう！』
 という課題を設定したが、教科や農場の関係で、1学年は自分で育てた野菜を使い、2・3年生の参加者は部活動生が育てた野菜を活用した。

イ 推進体制の整備

部活動でのプロジェクト研究よりスタートしたが、今後は農業高校ならではの特性を活かした取組となるよう「食農教育推進委員会」を設置するようにした。また、生徒組織を設置し、農を農業クラブ、食を家庭クラブが担当する組織体制を確立し、学校行事として定着させていきたい。
 部活動のプロジェクト研究も継続し、地域と連携した食農交流を実施して「弁当の日」をひろげる機会とする。

キ 生徒アンケートより

母が毎日、二つのお弁当を作っていると思うと、私は感謝が足りないなあと思いました。
 最初は面倒くさいと思っていましたが、お弁当を作ってみるとおもしろい楽しいことが分かりました。
 宮農の野菜を使うことで、より実習のときなど力を入れたいと思いました。こういう日を通して食の大切さも感じました。

ク 保護者アンケートより

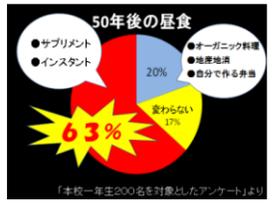
弁当は食べてくれる人の喜ぶ顔がみたくて作るもの。弁当を自分で作ることで思考力も高まり、喜びも得ることができると思います。
 宮農の野菜を使ってどのようなメニューにするかなどをいっしょに考えたりするのが楽しかったです。
 じぶんたちで作った野菜をいかして、必死で作っていました。とても上手にできていました。

ウ 実施学年の設定

食農に関する基礎的な知識や技術を学習する時期に、教科との関連を考え、1学年において実施することにした。また、2・3学年も含めた学校全体での取組へ発展できるよう条件整備を進めている。

ケ 成果と課題

※1年生205名のアンケート分析より
 《成果》
 問)「野菜はおいしかったか？」に対して100%の生徒が、「はい」と答えた。感想などからも、食や農に対して関心を持つきっかけとなった。また、家族との会話が増え、日頃弁当を用意してくれる親への感謝の気持ちを持つ機会となった。
 《課題》
 問)「どのコースで作りましたか？」に対しては、完璧コース(56名)手伝いコース(97名)感謝コース(26名)となり、今後は完璧コースを目指す生徒を増やすために「弁当の日」への理解を深めることが必要である。
 問)「50年後の未来、昼食はどのようなものになっていると思いますか？」に対して、63%の生徒がサプリメントやインスタント食品とマイナスにとられる意見を答えた。継続的な実施と併せて、より小さいときからの体験も必要と考えられる。



エ 教科等との関連付け

農業科においては、【農業科学基礎】、家庭科においては、【総合的な学習】にて関連する内容を学習する過程で、単元配列を工夫し実施した。
 また、学年PTA集会において、弁当の日の意義を学ぶ講演会を実施し、「宮農版お弁当の日」への理解を深めた。

オ 段階的な実施 (コースの設定)

参加者が主体的に無理なく実施できるよう、つぎの3つのコースを設定し、各自選択して取り組ませた。

- 完璧コース
 (買い出し、調理など1から全て自分でやる。)
- 手伝いコース
 (保護者の手伝いをもらいながら一緒に作る。)
- 感謝コース
 (作ってもらったことに対して感謝の気持ちを伝える。)